

演題番号：10

演題名：豚腎臓にみられた結節性汎動脈炎

発表者名：○浅岡祐太、仁平真由美

発表者所属：北部食肉衛生検査所

## 1. はじめに

結節性汎動脈炎は動脈周囲炎あるいは多発性結節性動脈炎とも呼ばれ、牛、馬、豚といった様々な動物で報告がある。全身のあらゆる筋型動脈および細動脈に起こり、特に冠動脈、腎動脈および髄膜動脈に好発するとされる。細菌、ウイルスおよび寄生虫等が原因として一般的とされ、血管壁への免疫複合体の沈着が機序として推察されている。今回、豚腎臓における結節性汎動脈炎を疑う症例に遭遇し、病理組織学的検索を行ったので報告する。

## 2. 材料および方法

平成25年1月25日に管内と畜場に搬入された豚（品種：雑種、性別：不明、月齢：7ヶ月齢）の腎臓1検体を対象とした。定法に従いHE染色、必要に応じてアザン染色、エラスチカ・ワンギーソン染色、PTAH染色を行い鏡検した。

## 3. 結果

肉眼所見：腎表面に小白斑が散在し、腎断面では葉間動脈から小葉間動脈にかけて動脈の肥厚が認められ、弓状動脈において特に結節状の肥厚が顕著であった。また、腎盤部は水腫状であった。

組織所見：葉間動脈および弓状動脈ではフィブリノイド変性を伴う内膜の肥厚が認められ、動脈内膜から外膜にかけてリンパ球および形質細胞の浸潤が認められた。同様の炎症細胞は動脈周囲においても認められた。小葉間動脈では血管周囲にリンパ球の浸潤が認められた。

アザン染色で肥厚がみられた動脈壁および動脈周囲における膠原線維の顕著な増生を、エラスチカ・ワンギーソン染色で肥厚した動脈壁での内弾性板の断裂を、アザン染色およびPTAH染色で動脈内膜へのフィブリンの沈着をそれぞれ確認した。

## 4. 考察およびまとめ

動脈炎は病変の主座により動脈内膜炎、動脈中膜炎、動脈周囲炎、汎動脈炎と分類される。一般的に中膜のフィブリノイド変性に始まり、動脈壁全層および動脈周囲への炎症細胞の浸潤が起こり、癒痕化するとされる。そのため、同じ動脈でもほぼ正常な部位から、血管壁全層に炎症を伴う部位と様々な病理組織像が存在するとされる。

本症例は肉眼所見および組織所見から結節性汎動脈炎と診断したが、原因の特定にはいたらなかった。行政処分としては、腎臓のみ部分廃棄を行った。しかし、全身性の炎症として全部廃棄処分された事例もあり、腎臓で本症例の様な動脈炎を疑う病変が認められた際には、枝肉を含め全身に病変が波及している可能性も考慮し好発部位である冠動脈等を含め、より注意する必要があると考えられる。